

## 新年にあたって



平成 21 年は、平成元年から 20 年経過した節目の年にあたります。過去 20 年間の酪農技術の発展を検証し、今後の酪農技術の発展方向について展望したいと思います。

農業経営診断等を行う場合、さまざまな経営・技術指標を使用して生産性・技術水準等を判断します。この 20 年間の乳牛の泌乳・繁殖成績(家畜改良事業団取りまとめの都府県データ)及び水稻の 10a 当たり収量(全国平均)に関する技術指標の変化は、下表のとおりです。水稻の単収が 51Kg (10.6%)増加したのに対し、搾乳牛 1 頭当たり 305 日乳量は 2,327Kg (34.0%)増加しました。農業生産に関する技術指標の中で最も伸びた指標は、搾乳牛 1 頭当たり 305 日乳量です。

しかし、分娩間隔が 398 日から 443 日へ 45 日伸びたため、1 乳期当たり日乳量に換算すると 17.2Kg から 20.7Kg へ 3.5Kg の増加にとどまっています。この間に飼料給与への考え方が「低投入低産出型」から「高投入高産出型」に変わったこと、乳価と購入飼料価格との相対価格比が大きくなっていること等を考慮すると、305 日乳量の伸びのみでは必ずしも所得の増加、経営コストの低減にはつながらないと思われます。

家畜育種上泌乳能力も繁殖能力も遺伝が関与するが、環境の影響を受けやすい量的形質に当たり、泌乳能力と繁殖能力には拮抗関係があると言われていいます。受胎率低下の原因としては、乳牛個体そのものの変化、乳牛を取り巻く環境の変化(特に人と牛との関係、人で言えば「職場環境」に当たる)などの要因が考えられます。

受胎率向上は多くの要因が関与する厄介な課題ですが、酪農家、人工授精師・獣医師、酪農協等の関係団体、そして試験研究機関が生産現場での情報を共有し取り組んでいけば、課題が明らかにされ解決されることと思います。

(表) 乳牛の泌乳・繁殖成績及び水稻の単収の変化

区 分	305 日検定乳量 (kg)	分娩間隔 (日)	1 回の受胎に要した 平均授精回数(回)	1 乳期当たり 日量(kg)	水稻単収 (kg/10a)
昭和 60 年(A)	6,852	398	1.8	17.2	481
平成 17 年(B)	9,179	443	2.4	20.7	532
増減(B-A)	2,327	45	0.6	3.5	51
増加率((B-A)/A)	34.0%	11.3%	33.0%	20.3%	10.6%

(技幹兼場長補佐 島田研)